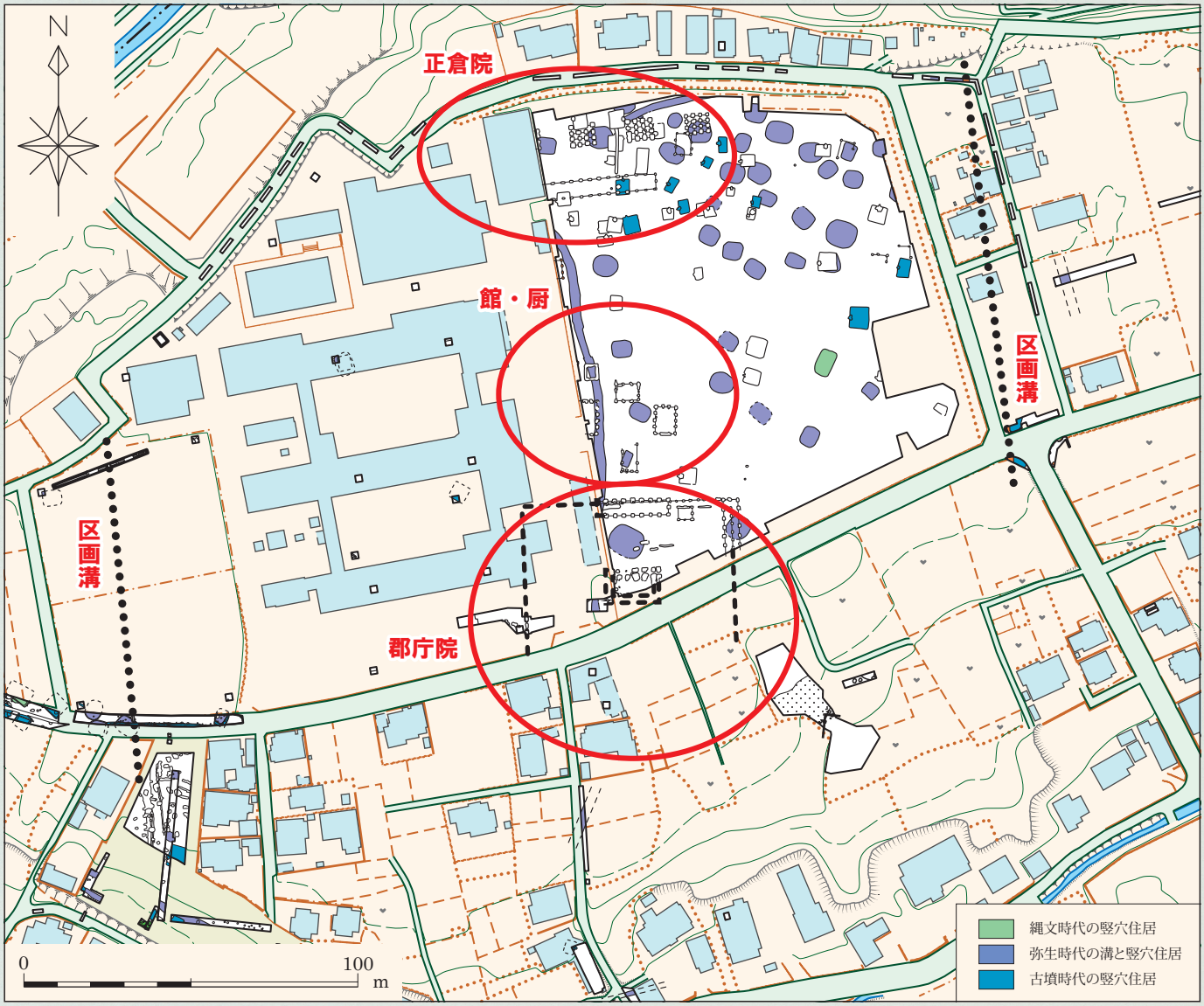
高座郡衙

平成14（2002）年に茅ケ崎北陵高校グラウンド部分の調査で発見された官衙遺跡は、調査を担当したかながわ考古学財団によって相模国高座郡の郡衙であると判断されるとともに、郡庁院、正倉院、館など郡衙を構成する建物の存在も明らかにされました。

郡衙の範囲については、周辺で行われた開発に伴う調査や範囲確認調査によって、区画を示すと考えられる溝状遺構が発見されており、東西の範囲は郡庁を中心に約270mの規模を有していた時期があったと思われます。また、南北の範囲は遺跡が立地する地形から推測して、約300mを有していた可能性があります。

郡衙の年代については、中心となる郡庁の遺構状況から複数の時期があると推測され、Ⅰ期が7世紀末から8世紀中ごろ、Ⅱ期が8世紀中ごろから9世紀前半と考えられています。

郡衙は台地の平坦部分に展開しており、中心となる郡庁院の正殿は舌状に張り出した台地のほぼ中央に位置しています。台地上に配置された郡衙の建物群は、遠くからもその存在を知ることができたと思われます。



高座郡衙遺構配置図

郡庁院

郡衙の中心となる郡庁院の規模は確認された範囲で東西約66mで、中央に配置された正殿は建物の四面に廂が付いた格調の高いものでした。当初は正殿の北側に後殿、東側には脇殿が配置されていましたが、後には塀などに変化したことが調査の結果でわかりました。

郡庁院（北東から）
（神奈川県教育委員会提供）

正殿（北から）（神奈川県教育委員会提供）

後殿（北東から）（神奈川県教育委員会提供）

正殿柱穴における土の堆積状況（北東から）
（神奈川県教育委員会提供）

高座郡衙推定復元図

正倉院

正倉院は、郡庁院の後殿より約100m北側の地点で、台地北縁に沿って東西方向に建物が４棟以上並んで確認されています。

建物は総柱の構造を持つ高床の掘立柱建物※で、税として集められた稲や作物が納められていた倉だと思われます。また、これらの倉の南側には並行して東西方向に非常に長い側柱建物※が建てられていたことが明らかになっています。

正倉院（南東から）
（神奈川県教育委員会提供）

東西に長い側柱建物（東から）（神奈川県教育委員会提供）

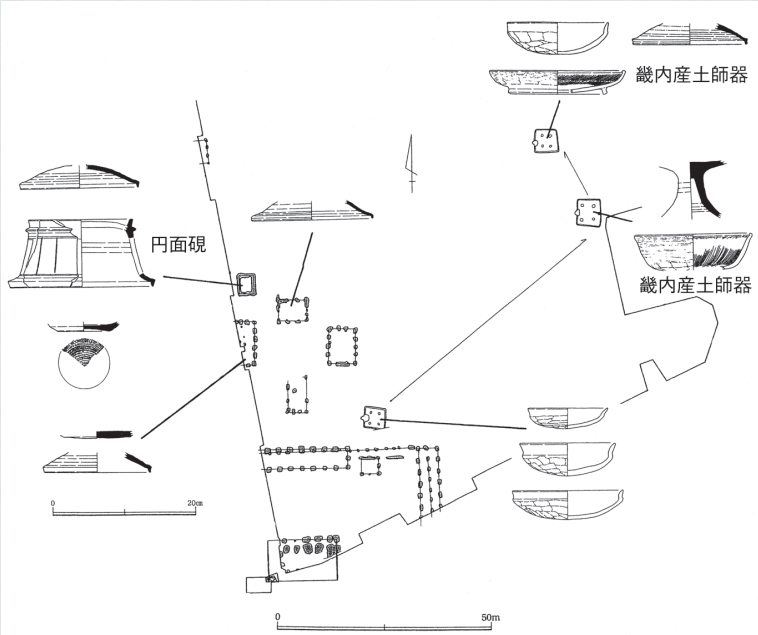
総柱建物※（南から）（神奈川県教育委員会提供）

復元された古代の倉庫（深谷市中宿遺跡）

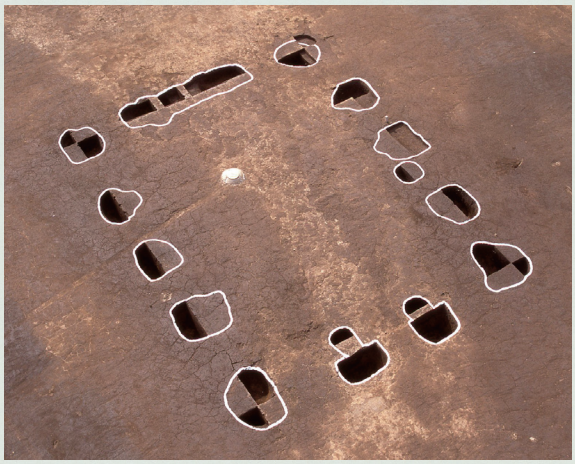
館・厨

郡庁院と正倉院の間には、竪穴建物※や布掘り※の掘立柱建物などの建物がまとまり、官衙特有の遺物が出土している部分も確認されています。このため、この場所には国内巡検を行う国司などのための宿泊施設である「館」や、郡役人の食事や巡検時の給食を賄う台所施設である「厨」が存在したのではないかと考えられています。

館・厨（東から）
（神奈川県教育委員会提供）

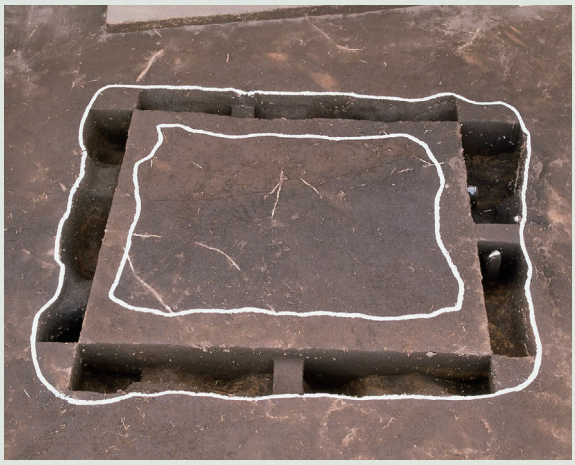


館・厨と出土遺物（「西方A遺跡」を改変）



側柱建物（北東から）（神奈川県教育委員会提供）

館・厨と考えられている遺構および周辺からは、暗文※を有する畿内産土師器や、須恵器の円面硯などが出土しています。



布掘りの側柱建物（東から）
（神奈川県教育委員会提供）

竪穴建物：地面を掘りくぼめ上に屋根をかけた半地下式構造の建物
掘立柱建物：地面に穴を掘り、柱の基部を入れ固定する工法の建物
側柱建物：建物の外回りだけに柱が配されている建物
総柱建物：建物の外回りに加え、内側にも柱がある建物
布掘り：複数の柱を埋め立てる溝状の柱穴の掘りかた
暗文：ヘラなどで土器の表面を磨いて描く文様

下寺尾廃寺（七堂伽藍跡）

下寺尾廃寺（七堂伽藍跡）が確認された場所では、古くから瓦などが発見されており、地元では古代寺院の存在が噂されていました。昭和32（1957）年には「七堂伽藍跡」碑が建立されましたが、考古学的な調査の手が入ったのは昭和53（1978）年に行われた岡本勇※による第1次確認調査で、この調査によって寺院跡であることが明らかにされました。この成果を受け、平成12（2000）年～22（2010）年に確認調査が行われ、伽藍域の範囲、主要建物の内容、寺院の年代などを明らかにすることができました。

寺院の変遷については、創建期が7世紀末から8世紀前半、再建期を8世紀後半、改修期を9世紀第2四半期から中ごろ、そして寺院廃絶期は9世紀後半と考えられています。さらに10世紀後半から11世紀代には、この場所に仏堂が建てられていたと考えられています。

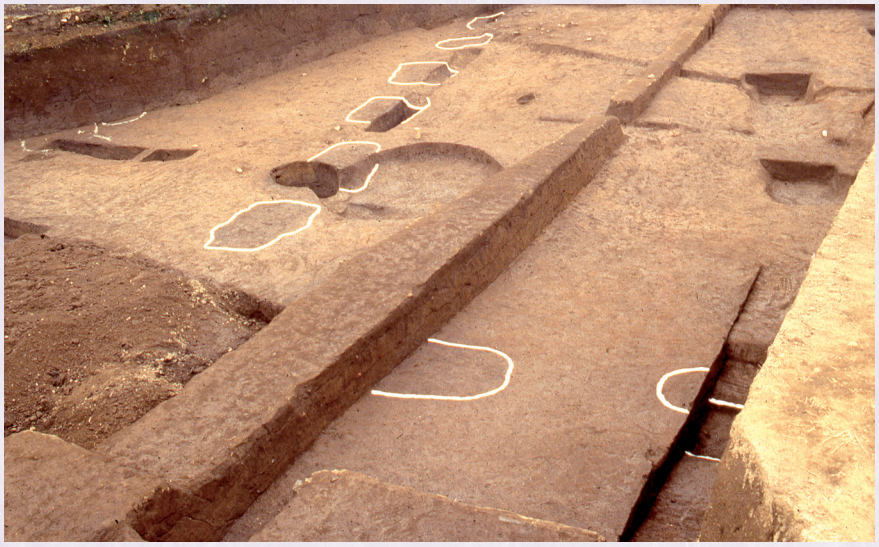
※岡本勇（1930～1997）：考古学者。茅ヶ崎市の文化財保護委員や市史編集委員として市内遺跡の調査・保護に尽力。

「七堂伽藍跡」碑

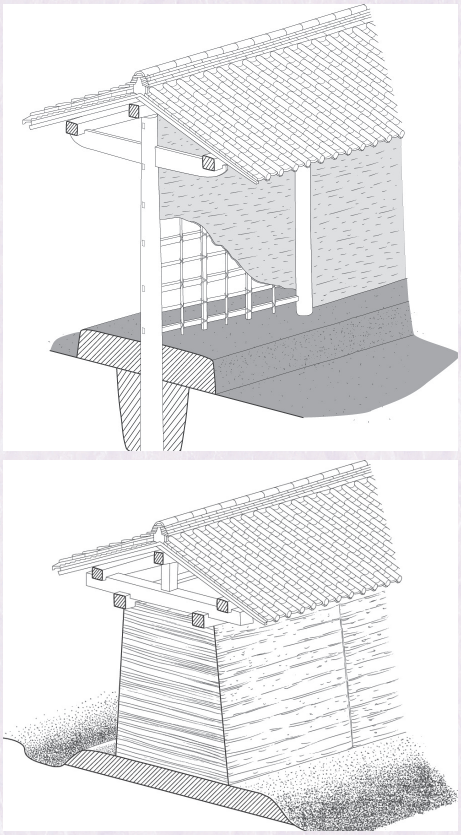
下寺尾廃寺（七堂伽藍跡）遺構配置図

区画遺構

寺院の規模や構造については、大型柱穴列や区画溝の存在によって寺の中心部分である伽藍域が確認され、時期によって伽藍区画の形状が異なることが明らかになりました。創建期には掘立柱塀によって区画され、不整の方形に囲まれた形であることが、また再建期には築地塀（ついじ）によって一辺78mの正方形に区画されていたことがわかりました。



創建期の大型柱穴列（北から）



掘立柱塀（上）と築地塀（下）の復元図
（シンポジウム「下寺尾官衙遺跡を考える」資料より）（2013）

再建期の区画遺構と土器および瓦の出土状況（北から）